

いずれにしても、信徒奉仕職にとって、キリスト信者が集う教会共同体との深いつながりが非常に大切であることには違いない。ただそれは、共同体が奉仕職を抑制する力となるのではなく、推進し支援する力となるような関わり方において実を結ぶことになる。そうした関わりの中で、それぞれの奉仕職にどのような形で「公的な承認」を与えるかは、時と場合によって必ずしも一律でなくともよいだろう。「霊を消すことではなく、すべてをためし、よいものを保つ」(教会憲章12)のために、「新しい奉仕職を認めるのに急ぎすぎてはならない」がしかし、「奉仕の必要性の緊急さをも意識し」、「その二に」に配慮するカリスマの発見に注意深くある」(教会奉仕職に関するアジア会議結論55)ために、両者が支えあう関係の中で、しっかりとした識別を倦まず続けたいかなければならないのである。

c. 信徒として担う奉仕職

* 司祭と信徒 — 奉仕職の質的な違いと自律性

洗礼によってキリストに結ばれたキリスト信者は、すべてキリストの祭司職にあずかるものとなる。「すなわち、洗礼を受けた者は、再生と聖霊の塗油とによって、霊的な家および聖なる祭司職となるよう聖別される」(教会憲章10)。こうして司祭・信徒を問わず、信者はすべてキリストの祭司職を担うこととなる。

しかし、「信者の共通祭司職と職位的または位階的祭司職とは、位階においてだけでなく、本質において異なるものであるが、相互に秩序づけられていて、それぞれ独自の方法で、キリストの唯一の司祭職に参与している。職位的司祭は、自分が受けた聖なる権能をもって祭司的な民を育成し、治め、キリストの代理者として聖体の犠牲を執り行ない、それを民全体の名において神にささげる。信者は、自分が持つ王的祭司職の力によって、聖体の奉獻に参加し、また諸秘跡を受け、祈り、感謝、聖なる生活による証明、自己放棄、行動的な愛をもって、この王的祭司職を行使する」(同上)。

したがって、信徒が奉仕職を担うとき、「共通祭司職と役務的祭司職の混同と均質化、……信徒の『教役者化』の傾向」(信徒の召命と使命23)についての注意が必要となる。信徒の奉仕職は、「洗礼と聖信、そのうえ大部分の者にとっては婚姻の秘跡のうちはその土台をもつ」(同上23)のであって、位階の秘跡によって与えられる役務的祭司職と本質的な違いを理解しなければならない。

「位階の秘跡だけが、位階に基づく奉仕職を、かしらであり牧者であるキリストの任務と、その永遠の祭司職とに特別に参与させる」(同上23)のである。この役務的祭司職は、御父と罪びとであった人間との間の仲介者となられたキリストの役割を示す「しるし」であり、共通祭司職を成り立たせる土台となっている。それは同時に、生活を通しておこなわれる信徒の共通祭司職なしには、役に立たず意味のないものとなってしまふものであつて、両者は異なりながら、互いに不可欠なものとして深くつながり、結びついているのである。

奉仕職における両者の違い(カトリック教会のカテキズム901~913参照)をもとに、上記のような信徒の教役者化を避けるよう注意しなければならぬ。「信徒の奉仕職は“聖職者”とまったく違うこと……は、はっきりと理解されなければならない。むしろ反対に、これらの奉仕職は、そのまま信徒に属するものであり、信徒の権利としてこの奉仕職をおこなう」(教会奉仕職に関するアジア会議結論34)のであり、互いの領域に入り込むのではなくむしろそれぞれ固有の役割をしっかりと担うことが求められるのである。